

## 初なりの良いいちじく

エレミヤ書 24 章 1-10 節

賈 晶淳

本日の聖書はエレミヤ書から選びました。エレミヤの時代はバビロン捕囚への入り口にあたります。ユダヤ教におけるバビロン捕囚の意味は苦難と挫折を通して鍛えられ、生まれ変わり、新しい時代へ導かれる歴史の境目であります。

エレミヤ書はエルサレムとユダ王国がアッシリアやエジプト、そして新興勢力である新バビロニアに囲まれ、いつ攻められるのか日々不安の中で過ごしていた時期に与えられた預言です。当時、ユダ王国を始め周辺諸国は力関係の変化に敏感となり小国間の同盟や大国のどちらと手を組むかを悩む中エレミヤの預言もその重要性を増していきました。それは今日における日本が米中間の関係悪化の中で米国側に手を挙げているのと似ています。つまり、一国の力では自立できない不安な時代であったということです。

今日の本文である24章の時代的背景はエルサレムがバビロニアに攻められた後の話です。殊に第1次バビロン捕囚と第2次バビロン捕囚との間です。バビロニアへの捕囚は二度、或いは三度に分かれて行われました。第1次バビロン捕囚は紀元前598年、第2次捕囚は紀元前587年前後に当たります。第1次と第2次の捕囚については列王記下の12章12節以下に、第3次捕囚についてはエレミヤ書52章にのみ出ています。

そして第1次捕囚の時にはエルサレムの城壁や神殿はそのまま残っていて、王政も残されていました。しかし、第2次捕囚の時には神殿も王政も城郭も全て破壊されてしまいます。つまり、宗教や権力、生活の場までがすべて破壊されてしまうのです。

そのようなある日、エレミヤは幻の中でエルサレムの神殿の前に置かれた二つの籠を見ます。そして「エレミヤよ、何が見えるか」(3節)と問う声を聞きます。この言葉はエレミヤ書1章の召命記事の中の11節と13節に二度出ています。そこでは「アーモンド(シャーケード)の枝」や「煮えたぎる鍋」の幻をエレミヤは見ています。

三度目である本日の個所でエレミヤが二つの籠の中で見たのは、一方の籠からは良いいちじくを、もう一方の籠からは悪いいちじくでありました。24章3節です。

**主はわたしに言われた。「エレミヤよ、何が見えるか。」わたしは言った。「いちじくです。良い方のいちじくは非常に良いのですが、悪い方は非常に悪くて食べられません。」**

そして、いちじくに対する説明が5節と8節以下に書かれています。先ず、良いいちじくについて5節から7節までです。

イスラエルの神、主はこう言われる。このところからカルデア人の国へ送ったユダの捕囚の民を、わたしはこの良いいちじくのように見なして、恵みを与えよう。彼らに目を留めて恵みを与え、この地に連れ戻す。彼らを建てて、倒さず、植えて、抜くことはない。そしてわたしは、わたしが主であることを知る心を彼らに与える。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らは真心をもってわたしのもとへ帰って来る。

5節に出て来るカルデア人とはバビロニアの別称です。即ち、良いいちじくとはバビロニアに捕囚として連れて行かれた人々を指しています。神が彼らに恵みを与え、神自身を知らせ、彼らを神の民とし、将来必ずエルサレムに連れ戻すという約束のメッセージです。

悪いいちじくについての説明は8節から10節までです。

主はまたこう言われる。ユダの王ゼデキヤとその高官たち、エルサレムの残りの者でこの国にとどまっている者、エジプトの国に住み着いた者を、非常に悪くて食べられないいちじくのようにする。わたしは彼らを、世界のあらゆる国々の恐怖と嫌悪的とする。彼らはわたしが追いやるあらゆるところで、辱めと物笑いの種、嘲りと呪いの的となる。わたしは彼らに剣、飢饉、疫病を送って、わたしが彼らと父祖たちに与えた土地から滅ぼし尽くす。

悪いいちじくとは第1次捕囚の時にエルサレムに残された人々とエジプトへ逃れた人々を指してい

ます。当時ユダ王国内にはバビロニアを支持する勢力とエジプトを支持する勢力がありました。エレミヤはバビロニアを支持する立場で、25章9節でバビロニアのネブカドレツアル王が神の僕であるようなことを言っています。エルサレムに残っていた人々は自分たちがバビロニアに連れて行かれなかったのを幸運と思い、エジプトに逃避した人たちも自分たちの意志で安全なところに避難できたと思い満足していましたが、二つのいちじくの幻を通して知らせたのは真逆の結果が示されていました。

結局、良いいちじくと悪いいちじくと分ける基準となりましたのは、どちらに神の意志が働いていたのかということでした。バビロン捕囚こそ神の計画であったということです。そして、神が行おうとした計画の内容の一つはダビデ王朝の終焉であり、もう一つは捕囚後のダビデ王朝に代わる律法や神殿中心の新しい共同体への移行です。ダビデ王朝の終焉についてはエレミヤ書22章24節から27節までに託宣として記されています。

**「わたしは生きている」と主は言われる。「ユダの王、ヨヤキムの子コンヤは、もはやわたしの右手の指輪ではない。わたしはあなたを指から抜き取る。わたしはあなたを、あなたの命をねらっている者の手、あなたが恐れている者の手、バビロンの王ネブカドレツアルとカルデア人の手に渡す。わたしはあなたと、あなたを産んだ母を、生まれたところとは別の国へ追放する。あなたたちはそこで死ぬ。彼らが帰りたいと切に願っている国へ帰ることはできない。」**

ダビデ王朝の終焉を通して新しい共同体へ移る過程には生みの苦しみが必要となります。そして、その神の計画のためバビロニアという大国が、またネブカドレツアルという王が神の僕として選ばれたというのがバビロン捕囚に対する積極的な解釈です。そのためその苦難と試練は神の恵みであり、将来の約束にも繋がるのです。そのため捕らわれた人々が神中心のアイデンティティを再確認し、回復のためリセットを経験することになるのです。エルサレムからバビロニアは遠い場所であり、言語も文化も宗教も異なり、そこに移されてヤハウエ共同体としての自分の存在に再び気づくことができたのです。森の中では森が見えない、エルサレムの中ではエルサレムが見えない、王権の下では神の支配が見えないということです。このことは一人旅で言語や文化などが異なるところで過ごすようになりますと自分の限界などが見え、それまで気づかなかった部分を経験するのと一緒です。

しかし、その孤独と苦しみを積極的に受け入れない限りは新しい出会いもなく、開かれた未来に向けての一步も進めなくなります。バビロニアを避けてエジプトに行くということは選択の一つでありました。より苦しみが少ない安住の場所を選択するのは人の知恵だと思います。しかし、ここではどうしてその選択を悪いいちじくに例えたのかについて考えてみる必要があると思います。

今、私たちはCovid19というコロナウイルスのパンデミックの状況の中で1年以上過ごしています。同じ場所に留まりながらコロナ以前とは全く異なる厳しい環境の中で過ごさなければならない経験をしています。これまで自由に動けた世界が見えないコロナウイルスの壁によって遮断され、形は違いますが一種の捕囚生活を送っていると考えられます。この死の不安を感じ、生活の基盤が揺さぶられる捕囚生活がいつまで続くのか、どう生きれば良いのか全く見当がつかない混乱の中です。エレミヤ書の今日の個所で示されているのは、先ずは現状をバビロン捕囚のように積極的に受け入れることであると思います。そして、この苦難の時を人類が共に乗り越えることを考えるようになった時に、人類の未来は新しい方向へと開かれるのだという教えではないでしょうか。勿論自らの安全と利益を守るのも選択の一つです。

本日の証詞の題を「初なりの良いいちじく」とつけてみました。2節の「初なりのいちじくのような、非常に良いいちじく」からの引用です。今回のパンデミックの苦しみを避けることができないなら、明日の世界へ向けての大切な意味として受け入れることを勧めたいです。パンデミックが終わった時点で世界は初なりの良いいちじくのように生まれ変わった世界となることを願います。現代世界の無計画な発展と急速な変化は人類と自然の共同体に大きな怪我をさせてきました。積極的な意味で今はその治癒の時、向きを変える時、回復を祈る時だと思います。(第229号・2021. 5. 9. 証詞より)